

● 最優秀

ロイヤルミルクテイー

6 / 26

吉田 幸子
よしだ さちこ

商店街のコンビニからの帰り、小坂勇吉は、右手に杖、左手におでんの入った袋を持って、大きな背中を小さく丸めて歩いていった。

灰色に曇った目が半歩先の足元あたりをうろついている。覇気の無い表情のせいか、七十四歳の年よりも随分老けて見えた。煤けた喫茶店の看板の周りで木枯らしが巻いた。誰も気づかないほどの坂が、足の弱った勇吉には酷くこたえて、風が身を切るように冷たくて、近いと思っただけで薄着で出たのを、ぐずぐず悔やんだ。勇吉の、青白いロウのような頬に涙がつつた。悲しいわけじゃない。冷たい空気に目ん玉が反応しただけだ。鼻水まで垂れてきた。両手がふさがって拭えないから、目をしよぼしよぼさせてわし鼻をすすった。

勇吉は、一足ごとに、「馬鹿やろう。馬鹿やろう」と繰り返した。

築二十四年のマンション『たつみ』によく着いた。実際には十分くらいの道のりなのに、勇吉は、

北の海で溺れて必死に岸に辿りついた、漁師の気持ちさえ分かる気がした。

簡単な暗証番号を打ち込むと自動ドアが開く。勇吉はほっと息をした。もちろん暖房は無いが、風が当たらないだけでも、『助かった』と思った。郵便受けを開けると、ダイレクトメールや気の早いクリスマスセールのチラシが重なっている。勇吉は、せかせかとおでんの袋に突っ込んで、そして、いつもの愚痴を繰り返した。

いい事なんか何もない。俺とここに集まって来るのは、どうせ、ごみだけだ。

勇吉は、一年前の交通事故で、自分より五歳も若かった、妻睦子を亡くしていた。

エレベーターの「上がる」のボタンを押すが、なかなか下りて来ない。おでんはだいぶ冷めているはずだ。いつまでも動かない階表示からぼんやりと目を下ろした。白い紙がテープで留めてある。

『修理中。階段をご利用ください』

赤い字をたどって、貼り紙の意味が分かって、勇吉は冷や水どころか氷水を浴びたように、青ざめた。肩がぐくと落ちた。

「何を……言ってるんだ……俺の部屋は……九階……九階……なんだ」

腑抜けた勇吉から、あぶくみたいに声が漏れた。目玉だけが勝手に動く。頭と体がかあつと熱くなる。凶暴な何かが体中を巡っている。「あー」と言う声と同時に、勇吉は、おでんの入った袋をエレベーターに叩きつけた。

固く握った拳がわなわな震えている。

壁に、茶色のおでんの汁が飛び散った。こんなにやくと卵が転がって、大根が潰れた。最近こればかり

食べているからか、エントランスに充滿した、だし汁の匂いが鼻についた。

結局、十五分ほどエレベーターは動き出した。下りてきた二人組の作業員が不審げに見る。勇吉は半ばふて腐れて、突っ立っていた。自分から何か言う気は無い。口の重そうな中年男が、若い方の男をあごでしゃくった。若い男は面白くない顔で、こんにくくと卵と大根と飛び散った汁を、乱暴に掃除し始めた。

誰も何も言わない。勇吉は慥然としてエレベーターに乗ると、⑨のボタンを押した。

903号室の玄関の大鏡に映った姿は、一見、いつもの、不機嫌でだらしないだけの勇吉に戻っていた。汁が体のあちこちにも飛び散ったらしくて、おでん臭い。さっきの出来事が頭から離れない。この匂いを嗅いでいると、自分のどこかに潜んでいた、あの獣のような衝動が、また暴れ出す気がして、部屋の暖房を点けても、震えは止まらなかった。

何だったんだ。俺は、どうしたんだ？

とにかく、『風呂を沸かそう』と思った。

高木正美は、マンション『たつみ』の901号室で、若い女にしては地味な、本人にすれば大切な荷物を、一つ一つ片付けていた。

インターホンが鳴った。ちょうど八時だ。今朝、引越して来たばかりだし、よれたスウェットだし、明日は出社しなきゃならないし、『挨拶は週末に改めてします』と一人ごちて、居留守を使った。

インターホンが執拗に鳴る。ドアの小さな覗き穴から、七十歳半ばくらいの小柄な老人が、落ち着き

なく立っているのが見えた。

「……何か」

「夜分、ごめんなさいよ。私、隣の902号室に住んでいる、山田たねって言う者だけど。越して来たばかりで悪いけど、ちょっと来てちょうだい」

『ごめんなさい』とか『悪いけど』とか言いながら、有無を言わせない強引さがある。

「……何でしょうか？」

「何でもいいから、早く来てちょうだい」

隣に住んでいると言う。顔を合わせてしまつては無視する勇氣も無くて、正美は灰色のスウェットの上下に学生みたいな紺色のコートを羽織つて、くたびれたスニーカーを履いて、迷惑顔で外に出た。グレーの小花模様のウールのワンピースに、薄紫のセーター、その肩に派手な鉤針編みを掛けたたねが、まどろっこしそうに902号室の鍵を開けた。隣の部屋に来るのに、きちんと鍵をかけてある。

「ま、待って下さい」

正美は、慌てて901号室に戻つて、床に放つてあつた鍵を掛けた。

902号室の、ベージュのペンキが剥げた鉄のドアの内側には、小さな緑のごみ袋が一つ、行儀良く置いてあつた。

「明日はごみの日だからね」

「……はい」

つられて返事をして、『嫌な予感』がした。

「あつ、靴持って」

「はい」

また返事してしまつて、自分が嫌になつた。

たねは茶色のつっかけサンダルを持って、ずんずんと部屋の中に入って行く。902号室は、正美の部屋とは風呂トイレが背中合わせの左右対称になつていた。

「あの、何なんでしょうか？……明日は仕事があるし、困るんです。……こんな事」

正美は、しどろもどろだ。ダイニングキッチンに置いてある、色とりどりの鉤針編みの掛かたつが目を引く。奥の六畳にある窓際のベッドにも、鮮やかな鉤針編みのカバーが掛けてある。どれも手編みらしい。

どれだけの時間がかつたのか、正美は、想像しただけでうんざりした。

たねが、ベランダのガラス戸を開けた。十二月の、夜の冷たい空気が一気に入ってきた。

「境目を蹴破つて、中に入ってちょうだい」

「はっ？」

「うちと903号室の境目。夕方、まるで人が倒れたみたいになすごい音がしたの。ばたんつてね。でも、それから、物音一つしない。この安普請のマンションでだよ。ピンポン鳴らしても出てこないし、……おかしいでしょ。死んでるんじゃないかと思つてね」

「……そんな。どこかに、出かけたんじゃないですか？」

一人暮らし早々、他人の面倒になんか、巻き込まれたくない。

「奥さんの睦ちゃん死んでから、夜に出かけるなんて、そんな事は一度も無いよ」
たねはきっぱり言う。自分の事みたいに。

正美はぼそぼそ言いながら、ベランダの境目にあるボードを蹴った。なかなか上手くいかなくて、そのうち自棄になって、他人の面倒をさっさと終わらせたくて、正美は、足元にあった植木鉢を振り上げた。

「山田さん。いいですね？」

植木鉢は隣のベランダに落ちて、派手に割れた。たねはパタンと外れたボードを身軽に潜って、植木鉢の残骸を横目で見ながら、903号室に入った。ベランダのガラス戸は鍵が開いていた。ファミリータイプの部屋らしく、十二畳ほどのリビングにダイニングテーブルと四脚の椅子とソファがある。カッボードはガラスが曇って、中が見えない。パッチワークの布が埃だらけの床にだらりと落ちて、枯れた観葉植物が部屋の隅を塞いでいる。

「何してるの。早く救急車呼びなさい」

裸の爺さんの横で、たねが、絞められたにわとりみたいな声で叫んだ。

正美が、電話でおろおろ状況を説明している間に、たねは爺さんを毛布でくるんだ。それから、今は一人暮らしらしい室内をぐるりと眺めて、勝手に筆筒を開けて衣類を何枚か出した。床に転がっていたウエストポーチを確認して、玄関のごみ袋の間にあった靴をビニールの袋に入れて、正美をつま先からずうっと見上げると、どこで見つけたのか、それを全部紙袋に入れて、正美の手に押し付けた。

救急車のサイレンで他の部屋の住人も気づいたようだ。遠巻きに様子を見ている。

「あんた、付いて行ってあげなさい」

たねは紙袋を無理やり、正美に持たせた。

「私？ 私、この人の事、何も知らないですよ」

「私が付いて行くわけにもいかないでしょ。年寄りには寝る時間なの。ほら、名前は小板勇吉、保険証も財布も中に入れておいたから」

たねだけでなく、その場に居る全員の視線が頷うなずいている。『あの……』正美は口をばくばくさせながら救急車に乗せられて、見知らぬ老人、裸の勇吉の横に座らせられた。

「ここはどこだ？……救急車……？降ろしてくれ。……余計なお世話だ。俺は大丈夫だ。……お前は誰だ？」

厄介なことに、勇吉は、狭い救急車の中で目を覚ました。起き上がるうとして、大柄な、骨の太い勇吉の足が正美を蹴った。

救急病院は昼間のように混んでいる。

正美はうろろうろついて回るだけだ。勇吉は、たぶん何時間も気絶していたくせに、散々文句を言って、夜勤の若い医者いしやの診察を渋々受けて、結局、今晩は大事を取って入院する事になった。さっさと帰ろうとする正美を見て、四十歳くらいのしたり顔の看護師が言った。

「ご家族の方、明日は九時までに来て下さい。慣れないと、お年寄りは不安がりますから」

「私、たまたま居合わせただけで、知り合いでも何でもないんですけど」

「あら、そうなの」

看護師は、まだ、納得がいかない様子だ。正美は構わずに、玄関に向かった。

タクシーに乗ってから、財布も持たずに出たと気づいた。『年寄りには寝る時間』とかいいながら、902号室はまだ明かりが点いている。自分勝手なたねが恨めしかった。

タクシーを待たせて、気忙しく部屋のドアを開けると、玄関の鏡に映った疲れた顔が、『馬鹿みたい』って、憎まれ口をたたいた。

引越して二日目になっていた。ベッドに倒れこんで、蹴られた足を擦りながら眠った。

仕事中に何度も欠伸^{あくび}が出て、正美は、誰かと目が合うたびに、笑ってごまかした。

「高木さんは、いいねえ。いつも笑顔で」

上司に言われて、仕方なく、また笑った。仕事を定時で切り上げて、夕飯は、会社の近くの洋食屋に入った。誰かを誘うのが億劫^{おっくう}で、一人で、目の前の空の椅子を見ながらハンバーグ定食を食べた。いつもと同じ電車に乗って、乗り越しそうになって、今日から、大藪の家に帰るのではないと、今さら思い知った。

正美は、表札を出していない901号室の前で、鍵を探してバッグをかき回していた。

「お帰り。昨日は、大変だったね」

902号室のドアがタイミング良く開いた。まるで正美を『待っていたように』だ。

「いえ」正美は身構えた。

「昼間、小板の爺さんの息子が挨拶に来たよ。あんたの分の菓子折も預かっているから、取りにおいで」

「息子さんいるんですか?」

「いるよ。嫁さんもかわいい孫も。転勤族だから、一緒には住んでないけどね。……とにかく、取りにおいでよ」

『山田たね』改めて表札を見る。一人暮らしのようだ。正美は、『やっぱり』と思った。

「紅茶、飲む?」

のんきな声がわざとらしく聞こえるのは、気のせいだろうか。

「いえ。結構です」

「そう、私はいただくよ。……あら、そんなとこに居ないで入っておいでよ」

やかんをガスにかけて、お湯を沸かし始める音がする。正美は罨わなに掛かった気がする。

「年を取ると夜が長くてね。古い先は短いのに、時間はたっぷりある。皮肉だね。眠れないと思うと辛いから、いっそ眠らなくてもいいって、起きてしまっただよ。一晩中ラジオを聴きながら、編み物してね。睡眠不足だって、怖くも何ともない。次の日、昼寝する時間はたっぷりあるからね。ははは……」

時間だけがたっぷりある一人暮らしの老人。

放っておいたら、一人語りはまだまだ続きそうだ。喋しゃべるのをやめるのが怖いみたいに見える。『帰る』って言ったなら、がっかりするだろうか。正美は自分の中の残酷な気持ちに気づきそうになって、目を瞑つぶった。

「まだ片付けも残ってるし、明日も会社だし、……昨日も遅かったし……」

「ほら座って。コートぐらい脱いで。……まあ、この一杯だけでも付き合いなさいよ」

たねは、全く急ぐ様子はなくて、紅茶の葉っぱを見せたり、クッキーを勧めたりする。

「角の喫茶店の奥さんが分けてくれてね」

お湯が沸くと律義にガスの元栓を締めた。紅茶の入った大きめのカップに、電子レンジで温めたたっぷりの牛乳を入れる。

こたつ以外に暖房の無い部屋は寒くて、正美は、ばらの花からのカップを、マニキュアもしていない冷たい手で包んだ。カップを揺らして、紅茶と牛乳が混ざるのを見ていたら、何かを思い出しそうな、変な気持ちになった。

正美が十歳の時、両親は離婚した。母親が原因だったようだが、誰かに聞いた事は無い。父親が正美を引き取って、でも商売をしながら育てるのは無理で、すぐに、妹の大藪のおばちゃんに預けられた。正美は、おじちゃんとおばちゃんと二つ年上の浩輔の三人家族に、途中から、交せてもらったのだ。

浩輔はしょっちゅう喧嘩けんかを吹っかけてきた。浩輔だって、三人家族に邪魔者が割り込んで、寂しかったり悔しかったりするだろう。

「おまえ、仕方なく置いてやってるんだぞ」

いつものたわいない口喧嘩あひくの揚句あげくだった。言った後で、浩輔は『しまった』って顔をして目をしばたかかせた。「ふうん」正美は平気な顔をして、小犬の『たる』の頭を撫なでた。

その時の気分が、ふと懐かしい匂いのように体全体を包む時がある。悲しくとも何ともなかったはずなのに、思い出すたびに、丸い鼻の奥がつんとする。正美は目を瞑る。

浩輔が正美に食って掛かると、おばちゃんは笑って、浩輔を叱しかった。おじちゃんは、浩輔のふくれた面をからかった。そうして、大藪の家に交じっていった。

おばちゃんは可愛いチェックのワンピースを作ってくれて、おじちゃんは運動会で一緒に走ってくれて、兄弟喧嘩してくれる従兄弟もいて、後に再婚した父親は仕送りを欠かさなかったし、母親も、毎年どこからか、クリスマスと誕生日のプレゼントを贈ってくれた。

「短大くらい行ったら」

高校を卒業する時、おじちゃんもおばちゃんも進学をすすめた。再婚してめったに顔を見せない父親だが、商売は上手くいっているらしい。正美は遠慮したわけでもなく、何となく、地元の地味な食品販売会社に入社した。

何がしたいのか、何が欲しいのか、正美は分からなかった。したくない事と、いらぬ物だけが、いつも、はっきりと分かっていた。

すっかり年取った『たろ』が、正美の傍そばに来て、『頭を撫でろ』と体を寄せる。

「正美。浩輔結婚するんだって。まっ、この家には住まないんだけどね。でも、彼女挨拶に来るから、その日はあんたも家にいてね」

「ふうん」

正美は、『たろ』の頭を撫でた。正美が残って浩輔が出て行くのは『違う』と思った。

大藪の家と会社の間、築二十四年のマンション『たつみ』を見つけた。古い商店街にくすんだタイル貼りが馴染んだ、九階建てのマンションだ。大藪の家に来て十四年が過ぎていた。初めて父親を呼び

出して、保証人の欄に名前を書かせた。六十歳近い父親が、封筒を押し出しながら、薄く笑った。
「引っ越し祝いだ。……でも、結婚するんじゃないのか」

遠慮がちな笑いが、おじちゃんやおばちゃんや浩輔より遠く感じた。
薄情なのかな。……私は。

『たろ』の手触りがよぎった。大藪の家には、引っ越しの手配が終わってから報告した。
浩輔が呆れたように言った。

「お前、相変わらず馬鹿だな」

おばちゃんは俯うつむいてため息をついた。

「正美は強情だから……」

おじちゃんが苦く笑った。

強情？ 誰が？

小さい頃から無理をとおした覚えは無い。何かを言い張ったつもりも無い。いつだってどう言ったらいいか、どうしたらいいか分からなくて、じっとしてただけだった。

引っ越しの朝、浩輔がすれ違いざまに言った。

「……たまには、帰って来てやれよ」

おばちゃんの目に涙が光った。何もかも一人で準備する正美を、所在無く見ている。

……私だけを見ている。

正美は、甘酸っぱい気持ちになった。

空っぽの涙がぼろぼろ落ちる。

引越したんか止める。ずっとここに居る。

叫びそうになるのを、無理やり飲み込んだ。

正美は、おぼちゃんの膝で、子供みたいにしゃくり上げた。頭を撫でられながら、とろけそうに気持ち良くて、『もっと前に泣いておけば良かった』と悔やんだ。

欲しい物はこれだったのかもしれない。

「良い人ができた時は、この家からお嫁にいくんだよ。私が、ちゃんと支度してあげるから。……ずっとそのつもりなんだから」

たねの話によれば、勇吉は家族の希望もあって、もう少し検査してから退院するそうだ。

正美は、たねの、とりとめのない長い一人語りを聞きながら、冷めたミルクティーを、何故か、残り惜しい気持ちですすった。

正美は週末に大藪の家に行った。浩輔の彼女は小さくて可愛くて、似合いの二人だった。近くのマンションに住むらしい。長野のりんご農家の娘で、大学の後輩だそうだ。親から誂あつらえてもらったりんごをおおずと出す娘に、正美は嫉妬した。似合いの二人を見るおじちゃんとおぼちゃんを見て、鼻の奥がつんとした。正美は、物欲しげな赤い目を逸そらした。

帰りに、袋いっぱいのおりんごを持たされた。甘い匂いが部屋に満ちて苦しくなる。

一人じゃ食べきれないから……。

正美は自分に言い訳して、たねを訪ねた。

903号室のドアの前に大きなごみ袋が三個出ていた。明日はごみの日じゃないのに。

「あら、珍しい。どうしたの？」

902号室のドアは直ぐに開いて、たねが弾けるように笑った。満面の笑顔が泣き顔にも見えて、正美は思わず目を瞑った。黙ってりんごを差し出した。たねは愛おしそうにりんごを撫でた。自分が撫でられたように、正美の頬が赤くなった。

「お茶にしよう。ねっ」

たねは返事も待たずにキッチンに向かった。

紅茶を淹れる後ろ姿が思ったより小さい。

子供みたいに頼りない。

たねの寂しさの中で、正美の寂しさが薄まっていく。正美は、ふうっと息を吐く。

この背中を見たかったのかもしれない。

「あなたいくつ？」

「……もう二十四歳です」

「もうだなんて嫌だねえ。私なんて八十二歳。小板の爺さんだって、七十四歳。もうだなんて、本物の年寄りに失礼じゃないの。まったく」

「……ごめんなさい」

思いのほか強い口調に、正美は強張^{こわば}った。

「はっ。本気にしたのかい。子供だねえ。年寄りのお遊びに引かかって。はっはっは」

たねの小さな背中がかたかた揺れた。『我慢できない』と笑い出した。たねの大きさにおどけた笑い声が、正美のいびつな独り相撲と重なる。切なくて、目がぼおっと熱くなって、何だか悔しくなって、小さな子供をもてあそぶように、意地悪したくなった。

こんな事で、楽しそうに笑わないでよ。

……そんなに嬉しそうにはしゃがないでよ。

正美は、泣きたいのを、前を睨^{にら}んで堪えた。

「おや、今度は怒ったのかい。冗談だよ。分かんないかね。こりゃ、ぜねれーしょんげっぶだね。はっはっは」

正美の目から、はらはらと涙がこぼれた。

たねの白い指が正美の頬の涙を、大事そうにすくった。自分より寂しいたねの前では、どんなに泣いても惨めにならなかった。

「若い人はいいねえ。直ぐに、怒ったり笑ったり泣いたり、生きてるって気がするよ」

たねは穏やかに笑う。正美は安心して泣いた。無邪気な笑顔が後ろめたかった。

……ごめんなさい。私は、……あなたの寂しさを利用しています。

たねは音を立てて紅茶をすすった。一息ついて、迷い猫と頭のいいからすの話 시작했다。

「……小坂さん戻られたんですね？」

たねは真顔になって、903号室との境の壁に目をむけた。困ったようにも悲しそうにも見える。正美は中途半端な気分になる。

「……あの人がだって、最初は頑張ってたんだ。いつまで続くか分からないんだもの……。誰だって、嫌になっちゃうんだよ……」

903号室の廊下のごみ袋は徐々に増殖して、マンションの掲示板にも、903号室のドアにも、注意書きが貼られた。正美は、大きなごみ袋をよろよろと集積所まで運んでいるたねと、何度かすれ違った。手伝おうかとも思ったが、たねの方が正美を避けているようにも見えて、声を掛けそびれた。

おばちゃんから電話が来て、簡単な大掃除を済ませて、正月は大藪の家に帰った。

穏やかな三が日だった。

お隣さん、静かだね。実家にも帰ってるのかね。……あの子、一人ぼっちみたいな顔して、何を怖がってるんだろ。……そろそろ戻ってくるかね。また、ピンポン鳴るだろか。……英さん、私、贅沢ぜいたく言ってるかね。

「こら。たね。調子に乗るんじゃないよ」

手紙を指で撫でながら、はしゃいで、壁に向かって声を出した。ここ何年も、一人で正月を迎えている。今年も、一杯の雑煮を食べる以外、何の正月らしい事もしなかった。

遅くに結婚して子供のない夫婦だった。同じ年の夫婦はそれも良しとして、郊外のばらが自慢の一軒家で、年とった同級生みたいに暮らしていた。退職して間もなく、夫英作が、長患いもせずに逝ったの

は、六十歳の時だ。

英作が亡くなって、一周忌が終わった後だ。

たねは、久々に一人暮らしの友達と食事をした。早めに休んで、夜明け前、ベッドが二台並んだ寝室で目を覚ました。胸が潰れるように苦しい。心臓を押し掴みにされたようで身動きがとれない。息がでない。『英さん、私も行くよ』と覚悟した。潰れた肺の隙間に細い息を騙し騙し送っていたら、一度死んだ肺が心臓が固い体がゆっくりと生き返った。

凍りついた部屋で、隣の空っぽのベッドを見ながら、そのまま朝まで一睡もしなかった。

たねは、保証人のいない六十女の賃貸マンションを用意する事を条件に、思い出の家を売った。何もかもを処分して、わずかな身の回りの物だけを持って、当時新築だったマンション『たつみ』での暮らしを始めた。敢えて賃貸にしたのも、支払いを自動銀行振り込みじゃなくしたのも、最後の日が来ても何か月も知られずにいるのが怖かったからだ。

引越した日に最初の手紙を書いた。そして、幾度も書き直した。近しい誰かが亡くなるごとに。心を寄せた人が去って行く度に。

何だか寂しい子だね。

901号室に越してきた正美は、自分とどこか似ている気がした。人恋しい日、たねは、幾度か901号室の前に立った。留まって、902号室に戻って、長い夜を思い巡らせた。

正美が真っ赤なりんごを抱えて訪ねて来た日、たねは、密かな『希望』を持った。

誰にも気づかれないで、何日もして身知らぬ人に発見されるよりずっといいよ。『発見』なんて嫌じゃ

ない。悲しいじゃないか。

ばら色の便箋で、正美あての手紙を書いた。

最初の手紙には、もし見つけたのが正美でなかったら、この二通目の手紙は誰の目にも触れさせずに捨てるように、と書き足した。

たねは、いつかやってくる日の為に、ベランダの境目のねじを緩めた。ガラス戸の鍵は、あの日から閉めていないけど、たねは今までよりずっと安心して、幸せな気持ちで眠れた。

正月三日、正美は、大藪のおばちゃんが持たせてくれたおせちを抱えていた。

この間の『ごめんなさい』……だね。

『待っていたみたい』鍵が開くはずだ。たねの笑顔が浮かんで、正美は苦笑いした。

たねはなかなか出てこない。続けさまにインターホンを押す。不安になる。何か起きてそうで怖いのに、上手に目を瞑れない。

正美は901号室に戻って、靴を持ってベランダに出た。902号室との境目のボードはあっけなく外れた。あんなに用心深いのに、ガラス戸は鍵が開いている。息を飲んだ。『山田さん。たねさん』正美は大声で叫んだ。

心臓発作だった。医者は、『長い時間は苦しまなかっただろう』と、気休めに言った。

派手な鉤針編みを取り払うと、余分な物の何も無い部屋だった。小さなごみ袋の口が縛ってあった。

少ない家具と鉤針編みとごみ袋は、物慣れた業者たちがやって来て、たねの指示通り、淡々とあつけない片付けられて、正美の手元には、ばら色の手紙だけが残った。

正美ちゃん。(馴れ馴れしいかい。でも、いかにも、仲良しみたいだろ) じゃあ改めて、

正美ちゃん。見つけてくれて、ありがとう。

驚いたろうね。私は、今頃天国の入り口で、あんたと旦那の英さんに感謝しているはずだよ。あんたは迷惑だろうけど、あんたに見つけて欲しくて、英さんにお願ひしたんだよ。

面倒掛けて悪いけど、二、三本電話してもらえれば、全部片付くはずだから。勘弁してちょうだい。

お骨の始末まで自分でできる時代だけど、最期の時に、誰も私の事を知らない中で眠ってるなんて、寂しい気がしてね。死んでしまえば一緒なもの、無いものねだりはみつとも無いって言い聞かせただけど、やっぱり我慢できなかった。ごめんね。

あんたと二人で飲んだ紅茶は美味しかった。本物のロイヤルミルクティーだった。あんたとのお喋り、楽しかったよ。正美ちゃん、私のはあんたのおかげで幸せだよ。ありがとう。

天国で、正美ちゃんの幸せを応援してる。

あんたは、ひとりじゃないよ。

たねには、夫も、一人息子も嫁も孫も、おじちゃんもおばちゃんも、浩輔もいなかった。

誰にも甘えない、誰も恨まない、『幸せだよ』が悲しかった。何も持たないたねが残した、『ひとりじゃ

ない』に正美は号泣した。

903号室の前のごみ袋がまた増えだした。無人の902号室まではみ出ししている。たねの困ったような悲しそうな顔を思い出した。

仕事の帰り、正美はコンビニで勇吉を見かけた。垢^{あか}じみた服を着て、風呂にも何日も入っていないのだろう。いかにも投げやりな、ふてぶてしいとも思える様子だった。コンビニの店員も目を伏せて、通り過ぎるのをじっと待っている。お湯くらいは沸かすらしく、袋の中にカップ麺とバナナが見えた。

杖を鳴らして苛々^{いらいら}と歩く勇吉の後ろを、正美は追い越せずにいた。肌が粟立って、心臓がとくとく鳴る。自分が何をしようとしているのか分らない。ただ、勇吉の後ろを歩いていた。勇吉は、道のあちこちに憎々しげに痰^{たん}を吐いた。前から来た少年はあからさまに眉をひそめた。子供を連れた母親は、大事な子供を自分の陰に隠した。勇吉はそれを全部知っていて、わざと痰を吐いているように見える。正美は『この人は怒っている』と思った。

自分を一人にしておく息子夫婦、先に逝ってしまった亡き妻、見ない振りをして後ろ指を指す近所、そして居ることにさえ気づかない世間、何もかもに怒っているのだと思った。

マンション『たつみ』の自動ドアがゆっくり開く。人目の無いエントランスに入ると、勇吉は気が抜けたように見えた。正美は勇吉の目に入っていない。半開きにした郵便受けの扉から、郵便物が溢^{あふ}れる。わざとなのかどうでもいいのか、勇吉は振り返りもせずに、そのまま「上がる」のボタンを押した。旧式のエレベーターはゆっくりとしか動かない。

正美は、落ちたチラシの束を黙って拾うと、勇吉の横に立った。ぼんやりとした目をむける勇吉の手を取って、コンビニの袋に入れた。

「小板さん。隣の高木です。……ごみの日は明日です。捨てるなら、明日出して下さい。……仕事に出る前なので早いけど、七時に伺います。……一緒に片付けましょう」

言うだけ言うと、その場に居たたまれなくて、横の階段をかけた。汗が吹き出す。むきになって、足をもつれさせて、喘ぎながら九階まで上った。上気した顔で、表札の掛かってない902号室のドアに向かって言った。

たねさん、格好つけすぎです。残念です。私たち、きっとこれからだったから。……でも、ありがとう。私もっと素直になります。

◆受賞者の横顔◆



宮城県仙台市に生まれる。
夫の転勤に伴い、現在は愛知県刈谷市に在住。
主婦。

昭和33年生まれ。
愛知県在住。

よしだ
吉田
さちこ
幸子

◎

寂しいと、人は、自分が思う幸せを頭に描いて不幸がったり、誰かと比べて惨めになったり、周囲をうらんで頑なになったりする。誰かとながっている実感があれば、人は、どんな状況でも案外、幸せかもしれない。
そんなことを思いながら書きました。